

学校点描

春になったと同時に、施設のあちらこちらが故障してきました。この冬の厳しさを物語っています
《K中学校》

NO. 23(最終号) R3. 3. 15

担当：校長

県中体連から今年度の体育・スポーツ優秀指定選手の指定証が届きました。本校からソフトテニスで、H・Fさん、H・Iさん、クロスカントリースキーでK・Gさん、O・Kさんが授与されました。

11月から9回講座で行ってきたスチューデントサポーターの認証式を行いました。M・Rさん、A・Mさん、M・Hさん、I・Hさん、K・Eさん、S・Mさん、M・Aさん、K・Aさん、K・Rさんに認定証を授与しました。今年の11月に2期生を募集する予定です。

25日（木）に、山田 拓先生と岸綾子先生が、『第8回新庄龍山ジュニア短歌コンクール』で優秀賞を受賞した5名の生徒に賞状を持参してくれました。受賞したのは2年生のJ・Tさん、M・Hさん、S・Rさん、I・Kさん、Y・Rさんです。両先生が「上手に言いたいことを切り取って表現しています。短歌づくりとは余計なことを削っていくことなんです。」と受賞した生徒の句について選評してくださいました。その中の2句を紹介します。

『 秋風の少し寒くて 枯れ葉散り さみしさつのる 秋の夕暮れ

Y・R』

『 秋風に揺られて落ちる 楓の葉 冷たい地面を 真っ赤に染める

S・R 』

金小時代に短歌を教えた山田先生が、とてもうれしそうでした。

来年度へのリレー

公立高入試も終わり、いよいよ学校の中では次年度に向けたリレーの準備が行われます。リレーは、英語「relay」からの外来語で、「後ろに残す」という意味のラテン語が、英語化されたものだそうです。3月11日は、福島県南相馬市出身のT先生が、自らの体験を自作したスライドを使って、全校放送で語ってくれました。思い出すのも辛い話でしょうが、ある意味使命感の気持ちで語ってくれているなあと感じました。後に伝えるという強い思いのこんなリレーもあります。

今年度も終わる前になって、残念なことがありました。体育館ギャラリーの階段付近の壁に穴があきました。誰があけたのかわかりません。状況からすると、間違いなく本校の中学生の誰かなのですが、集会をしてアンケートを取っても、誰も名乗り出てくれませんでした。卒業式や入学式、体育館での行事の多さを考えると、このまま穴をあけっぱなしにはできません。担任の先生方をお願いをして、アンケートをとった後に、修理を手伝うボランティアを呼びかけてもらいました。ただし、あくまでもボランティアですので誰も手を上げないかもしれません。



心配をよそに、8日（月）には、男女合わせて7名の生徒が放課後体育館に集まって、壁の修理のボランティアをしてくれました。こんな気持ちのリレーをつなぎたいものです。

先週、友人との話の中で「朝、NHKのニュースの中で桑子アナウンサーが紹介した大変感動した話題があった。」と教えてもらい、その内容に大変興味をもったのでネットで検索してみました。

30代で突然視力を失った男性 山崎 浩敬さん（和歌山県）の絶望に光をあてたのは、小さな小学生たちがとった行動だったというものでした

私は、視覚に障害があります。平成17年に、仕事を休職して視覚障害者リハビリテーション施設で、復職に向けた訓練を一年間受けて復帰しました。

白杖を持ってバスでの通勤でした。中途障害の為、当初は不安でいっぱいでした。会社に着くと、ほっとして緊張がほぐれて、何もできない状態という毎日でした。

朝の通勤に使うバスには、和歌山大学附属小学校の児童が乗っています。ある朝、「おはようございます」というかわいい声が聞こえました。「バスが来ました」また声が聞こえました。そして、私の腰のあたりに温かい小さな手があたりました。そして、バスの入り口前まで誘導してくれて、「階段です」と言い、背中を入り口方向に押し出してくれました。座席に座っている子に向かって、「席に座らせてあげて」と言ってくれました。感動です。私は遠慮しながら、「いいの？」と言うと、「座って」と返事が返ってきました。そして三年が過ぎ、その子も中学生になりました。でも妹が、その手引きを引き継いでくれて、私をバスに乗せてくれています。バスを降りる時も同じです。バスを降りると歩道を歩く私の腰を小さな温かい手で押してくれて、点字ブロックの上まで誘導してくれます。私は、大きな声で「ありがとう。車に気を付けてね」と言っている時も頭を下げます。

そして、彼女も小学校を卒業しました。でも毎朝、背中を押して誘導する彼女を見ていた周りの子供たちにこの作業は引き継がれています。今では、誰かが背中を押す誘導をしています。

温かい小さな手の小さな親切が、次々と受け継がれています。

あれから15年以上、私も退職まであと一年と半年、失明をした時は絶望のどん底でしたが、温かい手の小さな親切のリレーで、退職まで何とか頑張れそうです・・・。



誰から頼まれたものでもない、誰かがはじめた小さな手で全盲の人を支えるリレー。

代々、子どもが変わりながらも15年間続いてきたリレーの話です。

どのリレーも、誰かに指示されてやってるわけではないことに気づかされます。

きっと、それぞれの家庭にも、親から子へ引き継いでほしいリレーがあるでしょう。

渡したバトンを持ってつないでくれるかどうかは、あくまでも次の走者である子どもが決めることなんです。

1年間、拙いたよりを読んでいただきありがとうございました。

きりとりせん

ご意見・ご感想をお願いします。